

# 気配が溜まる中庭

- 大きな余白を共有する暮らし -

「触れて触られる家」とは、「他者の気配に触れる・自分の存在に触れてもらえる家」と考えた。コロナ禍において注目されているベランダや庭空間を生活の場の拡張として利用する行為をヒントに、居室の屋外空間と共用通路空間が一体となった集合住宅を提案する。直接的な交流だけでなく、間接的に他者の存在に触れられる家を設計した。

## ■コロナ禍で注目された「ベランダ」「庭」の余白性

新型コロナウイルスの拡大により、自宅での滞在時間が増加した。生活の場を少しでも広く、豊かにするために「ベランダ」や「庭」を利用する例が多く見られた。これらの空間は特定の用途をもち、コロナのような非日常時にも対応が可能となった。例えばベランダを食事の場として使ったり、仕事の場、趣味の場として利用する事例もみられた。この「ベランダ」や「庭」が持つ余白性と、そこで行われる人間の行為に着目した。

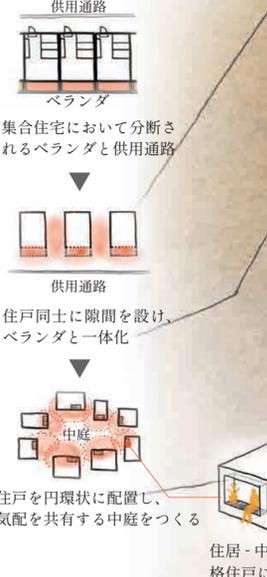


仕事場としての利用      食事の場としての利用

## ■「気配」に触れて触られる場としての庭空間

様々な行為が行われる「庭」空間を露呈させることで、人々が直接的にコミュニケーションをとるのではなく、そこでの生活・行為を垣間見ることによって他者の存在に触れ、自分の生活に触れてもらえる家ができるのではないかと考えた。本設計では、集合住宅において居室の最も奥に位置しがちなベランダ(庭)を玄関・共用廊下と一体化にする。居室を庭が内側に、輪になるように配置することで、他者の生活(気配)を垣間見ることができる集合住宅を設計する。

## ■平面構成ダイアグラム



## ■断面構成ダイアグラム



■設計敷地  
東京都 練馬区 大泉学園町



住宅街と生産緑地が混在する大泉の風景

この周辺には農地保全のための「生産緑地地区」が多く存在する。私はこの近所に在住経験があり、コロナ禍であってもオープンエアの環境で作業ができることや、区民農園を通じて住民同士で交流していたことが魅力的であった。しかし、2022年に8割の生産緑地の指定期限が切れ、生産緑地の売却、宅地化が懸念されている。

今回、建築物の地上レベルには庭だけでなく住民が利用できる供用菜園を配置する。そこでの活動と、畑を介して行われるアクティビティによっても他者の気配に触れて触れられる家を設計し、緑地のもつ可能性を引き出す。



## ■配置図 S=1/2000

敷地は駅から15分ほどの住宅街である。駅から離れた場所に集合住宅をつくる。テレワークなどにより在宅時間の長い居住者を居住対象としている。

## ■内観パース



3F 供用通路の風景。住人の園芸活動や、おすそわけされる菜園での収穫物などから、他者の暮らし・気配に間接的に触れる。



縁側空間からの風景。室内と中庭空間をつなぐ中間領域となる。中庭空間を通じて住人はそれぞれの生活空間を自由に調整することができる。

## ■内観パース

▼3F:GL+6000  
▼2F:GL+3000  
▼1F:GL+0

## ■断面図 S=1/200

3F: 1人暮らし住居・2人暮らし住居  
2F: 1人暮らし住居・2人暮らし住居・3~4人暮らし住居  
1F: 2人暮らし住居・3~4人暮らし住居  
居室を簡素にすることで、住民に屋外での活動を促す。  
庭・ベランダと一体化となった共用廊下の移動を通じて、間接的に他者の気配に触れる。また、自分の生活や趣味の断片が他者に触れられる。中庭に人々の気配が溜まっていく。